

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」

(2015 年度第 3 回研究会)

日時：2015 年 12 月 6 日（日） 13:30-18:00

場所：AA 研マルチメディアセミナー室（306）

概要報告

2015 年度第 3 回の例会として開催された本会では、共同研究員による 2 題の研究報告、および全体討論がおこなわれた。参加者は 15 名であった。

(1) 黒澤直道（AA 研共同研究員／國學院大學）

「ナシ語テキストの全体像」

共同研究員の黒澤氏は、ナシ族の言語文化の専門家である。今回の発表では、中国雲南省に居住する少数民族、ナシ族の言語であるナシ語によって記されたテキストについて、歴史的な形成とジャンル、テキストの記述方式などに着目しつつ、その全体像の解明が試みられた。

ナシ語によるテキストは、20世紀前半のトンバ經典の記述より始まる。中華人民共和國成立以降はラテンローマ字による表記法が作られ、特に1980年代以降はトンバ經典の記述に加え、民謡、ナシ語教科書、農業時術書などが出版されている。2000年以降になると、法律や共産党の指導文書などが増加するという傾向が指摘される。そのうえで、漢文化の浸透や近年の急激な観光地化により、ナシ語の文字普及が困難なものになっている現状が報告された。

(2) 山田勅之（AA 研共同研究員／大阪成蹊短期大学）

「ナシ族歴史史料概述：チベット語、モンゴル語、満州語を中心に」

共同研究員の山田氏は雲南麗江地区の歴史動態解明を研究テーマの一つとしている。今回の発表では、チベット語、モンゴル語、満洲語を中心に、ナシ族に関連する歴史（明清代）史料の現状についての報告がなされた。チベット語史料では、

高僧の伝記や政教史などの編纂史料、あるいは檔案資料集の中に、ジャン王（麗江木氏土司）とカルマ派高僧との交流、ギェルタン（中甸）地域におけるゲルク派改宗の動態などについて記載が見られる。また、モンゴル語及び満洲語史料（『蒙古堂檔』、『清内閣蒙古堂檔』）では、清朝皇帝とダライラマ5世の間で往復した書簡を取りあげた。これらにはカンドゥ問題や三藩の乱に関する協議の中で、雲南西北部の政治状況や茶馬交易の記述が見出される。さらに麗江版カンギェルの所蔵情報やチベット語・トンバ文字合璧の土地契約文書についても報告がおこなわれた。

以上の非漢文史料には漢文史料でほとんど見出せない情報が多数含まれており、従ってこれらの分析検討をさらに進めることは、雲南麗江の歴史研究に貢献できるものと考えられる。

(3) 全体討論

今回の研究会では、ナシ族の文字表記およびテキストをめぐる現状について、言語学及び歴史学の立場からの報告がおこなわれた。ナシ族は東巴文字という伝統的な文化形態をもつ一方で、建国後のローマ字化政策という雲南少数民族の多くに共通する社会動態を経験している。共同研究員それぞれが対象とする民族・地域との比較対照の観点から、活発な議論が展開された。また非漢文資料の研究状況についても情報交換がおこなわれ、次回以降のセッションにおいて焦点化することが検討された。

なお本例会は年度内最後の報告会である。1年目の研究活動の総括とともに、2年後の成果刊行計画についても意見交換がおこなわれた。

（文責：山田敦士）